



# ピャロとサクラ



1

夏川 宙

# ピャロとサクラ

## 第一章

1

「リャリ——ッ！」

ピャロが、いたずらっぽいな声を上げて、プールに飛び込むがごとく、コンソメスープの中に突っ込んだ。

チャポン！

水色・ゼリー状・人形の小さな身体を、四肢の無い円筒様に変化させ、クネクネと体を蠕動ぜんどうさせて、スープの中を気持ちよさそうに泳ぐ。

隣席の若いカップルが、興味深げな視線を不思議な生き物へ投げかけた。

「スープの中で泳いじゃダメって、言ってるでしょっ！」  
と、説教口調で、女子高生のサクラ。

ほのぼのとした雰囲気を持つ、可愛らしい顔の小柄なグラマーである。

# ピャロとサクラ

「ピャル」

悲しげな顔をサクラに向けて、ピャロはスープから飛び出て自分の姿を人形に戻すと、テーブル上で猫のようにブルブルと体を震わせて、小軀に付着したスープをまわりに飛ばした。

「きやつ！」

「ピャ」

「スープが人にかからないように、気を付けなさい！」

「ピャルー」

ピャロは瞳の奥に悲しげな光をたたえて目を伏せ、数秒後、サクラの肩に飛び乗った。サクラは、サラダ、コンソメスープ、メインディッシュの和風サーロインステーキを、時折、嚼んで柔らかくした物を口から出してピャロに食べさせながら、平らげてゆく。

「リャルツ！ リャルツ！」

とても美味しいと言っているのだろうか、ピャロは、小さな顔を喜悦の色に染めている。

食後のレモンティーの爽やかさを楽しみ終えたサクラが、淡いピンク色の唇を開いた。

「そろそろ、時間ね。行くわよ！」

「ピャル！」

# ピヤロとサクラ

胸を張ってピヤロが答え、テーブルからジャンプしてサクラの巨乳上に着地し、そこが自分の指定席であると主張するような表情を現して、座り込む。

サクラはレジで会計を済ませ、東京スカイタウンの賑やかな洋食レストランを出た。

東京スカイタワー第1展望台への高速エレベーターを擁する、エレベーターホールは混雑しており、ところどころで客達の楽しげな話し声が聞こえる。

「ピヤルツ！、ピヤルツ！」

ピヤロは、人々の長い列の最後尾に並んだサクラの巨乳の上で、トランポリンを楽しんでいる。

「時間かかりそうね」

「ピヤ——」

ピヤロは、そう言うとき空中で1回転して、サクラの左胸上面に頭から突っ込んだ。

「わっ！ もう！」

しばらくして、巨乳に埋まっていた頭を上げたピヤロが、サクラの左肩に飛び乗って可愛らしい唇を動かした。

「リヤルツ！」

サクラは、ピヤロの頭髮の無いツルツルした頭部を、中指で軽くなぜる。

# ピヤロとサクラ

「ピヤル——」

臉を少し下げてピヤロが発した、気持ち良さげなささやき声が、フェードアウトした。

15分ほどして、サクラ達はやっと高速エレベーターへ乗り込んだ。

「もうすぐ、展望台よ」

「リヤリ——ッ！」

そういうやピヤロは、サクラの肩を強く蹴って宙高く上昇し、空中3回転を決めてサクラの頭頂部へ舞い降りた。

周囲の客達が、ほほえましげに2人を見る。

サクラが微笑んで会釈した直後、高速エレベーターが動き始めた。

現在高度（m）の電光表示数値が、見る見る増加する。

「ピヤルッ！ ピヤルッ！ ピヤルッ！」

ピヤロは、サクラの頭の上で、嬉しそうにクルクルと水平回転している。

サクラが気圧差による違和感を耳に感じてから5秒程して、エレベーターは第1展望台に到着した。

驚きの速さだ。

「リヤル——ッ！」

エレベーターから降りて真っ直ぐに進むと、巨大な窓の手前に横に並ぶ人々が見えて

# ピヤロとサクラ

きた。

客達の隙間に入り込み、窓越しに外を見る。

「ピヤル——ツ!!」

と、甲高い声で、驚愕の色を浮かべたピヤロ。

「うわあ！」

宵闇のもと、天で超巨大な宝石箱をひっくり返したかのごとく、無数の美しい輝きがどこまでも続いていた。

# ピャロとサクラ

本作品はフィクションであり、  
実在のいかなる個人・  
集団とも一切関係ありません。

ピャロとサクラ 1  
<http://p.booklog.jp/book/68697>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/68697>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/68697>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ